

いけ好かない恋敵



“My Clerical Rival”

(1880)

一八六六年、ぼくがまだ学部生だった楽しい時代のことだが、長い休暇をどうやって過ごすかで、まったく異なる二つの選択肢のどちらかをとる必要が生じた。一方は、修行僧の鍛錬の場としてノルマンディー地方⁽¹⁾の非常に魅力的な辺境の地を見つけた友だちが、冗談のつもりで「読書会」と称して設立したもので、ぼくは是非そちらに参加したいと思っていた。もう一方は、ハンプシャー州⁽²⁾のどこか片田舎の村で教区牧師をやっている気さくな伯父から、かねてより受けていた招待であった。伝統ある学派の古典学者でもあった伯父は、ぼくに大学卒業時の優等賞⁽³⁾を屈指してもらいたかったようである、その準備として一ヶ月ほど一緒に本を読んで勉強の手伝いをしてやると言っていた。ぼくが前者の読書会に興味をそらされたのは当然だし、誰もがそう思うだろう。しかし、自分にとっては不朽の名誉になると思うが、ぼくは魔女キルケーの杯⁽⁴⁾を投げ捨て、自ら「快樂には目もくれず、艱難辛苦の日々を送る」⁽⁵⁾ことに決めた、その決意が鈍らぬうちに、そそくさと伯父のいるポズビー村の牧師館に向けて出立したのである。伯父は心から歓迎してくれたが、牧師館に到着する前から早ばやと、ぼくに古典の詳しい知識があるかどうか確かめるための質問を開始し、『アガメムノン』⁽⁶⁾のコーラスを暗唱しないうちは食事は一口も許さんぞと言いだした。ということ、ぼくはこれから始まる一ヶ月に尋常ならざる不安を覚えたが、他にも理由があったからかどうかは、以下の内容で分かるだろう。

当時のぼくは早起きだったので、伯父の牧師館では翌朝も六時に寢室の格子窓を開け放ち、

身を乗りだして新鮮な空気を吸いこんだ。すでに太陽が照りつけていたが、窓が西向きだったため、空から注がれる陽光の中で光かがやく景色を見渡すことができた。同時に、古い牧師館の陰になった場所に生えているツタの葉をサラサラと揺るがす微風そよかぜの馥郁ふよくたる香りを楽しむこともできた。窓の右手の方には心地よさそうな小道が牧師館の前を横切つて走っている。小道の途中には素晴らしいポプラ並木があり、その間からは広い牧草地の景色がちらちらと見えた。小道自体はどこまでも延びているように見え、どうやらポズビー村の本通りとつながっていたようである。一方、教会墓地の端であることを示すイチイの木(7)が何本も鬱蒼と茂っている。絵のように美しい古びた住まいだが、見るからに裕福な人たちが住んでいそうな家だった。この住宅はみごとに整備された大きな庭園の中央にあつて、その庭園と伯父の牧師館の地所とはヒイラギが茂つて聳そびえるように高くなつた垣根によつて仕切られていた。ぼくがいた二階の高い場所からは、もちろん、この隣の美しい庭園を見渡すことができる。とても魅力的に設計された美しい花壇に見とれているうちに、ぼくは田舎家の人たちに思いをめぐらせ、住んでいるのは興味深い人たちに違いないという結論に達した。伯父に、いの一に質問したかったのはこの人たちのことである。

隣の田舎家を調べたとき、窓のブラインドはすべて下りていたが、ぼくが思いにふけつてみると、正面の窓のカーテンが急に開けられ、窓枠も押し上げられた。それから一分もしな

うちに、玄関口の錠前と差し金はずす音がはつきりと聞こえ、すぐ家の中から美しい乙女が現れた。その美しさに匹敵するものがあるとすれば、東雲しののめの空の表玄関から姿を現し、目覚めた大地にほほえみかける曙オの女神ロの美しさ以外にはないだろう。それは若い女性で、ぼくの判断では十八歳か十九歳、かなり背が高く、みごとに体に白い服をまとい、ピンク色の帯を腰に巻いていた。手には大きな庭用の帽子を持ち、斜めから射す太陽の光に顔と長い栗色の巻き毛をさらしていたが、まるで陽射しが光輪のように彼女を包んで揺らめいているようだった。彼女の容貌について詳述するつもりはない。ぼくの貧弱な語彙では、その真価を不当に損なうだけだ。彼女の顔には今までに想像したことすらない清純さと優美さが見られたと言え、十分であろう。

たとえて言えば、彼女は自由を奪われた悲しきパラモンの眼前に（その五月の朝に）姿を現した麗しきエメリー⁽⁹⁾——ウィンザー城の庭園を歩いている姿をスコットランド王ジェイムズに見られ、彼に靈感を与えて「王の献辞」を書かせた麗しきレディー・ジェイン⁽¹⁰⁾——オジギソウ⁽¹¹⁾なる神々しい美の化身——テニスの「庭師の娘」⁽¹²⁾——これらのどれにもまさる、というか全部を合わせたものであり、ぼくの意識の中では非常にリアルな心地よい存在であった。物音を立てて彼女をギョッとさせるといけないので、ぼくは微動だにしないかった。少しでも何かしようものなら、彼女はきつと姿を消してしまうだろうと思ったのだ。どのくらい長く彼女を見つめていたかは分からない。分かったのはただ、彼女がやっと家の中に戻ったので、

体を硬直した状態から動かそうとしたにもかかわらず、両腕が完全に麻痺してしまって、だらりと力なく垂れてしまったことだけだった。彼女は姿を消してしまっていた。それと同時に朝の美しさも消え失せた。間違いなく太陽はまだ燦然と輝いていたはずであるが、ぼくには空が雲でおおわれているように見えた。しかし、この時ちようど朝食を知らせるベルが鳴ったので、ぼくはゆつくりと階段を降りて行つた。

隣の田舎家に住んでいるのはどんな人たちか、教区牧師の伯父に尋ねるのは非常に簡単なことだと思つていたのだが、いざ朝食のテーブルで面と向かつて座つてみると、この件で話をすることが、なぜか説明できないほど厭いとわしく思えた。伯父はテーブルに着席するとすぐ、前から一緒にやろうと提案していた勉強の話を始めた。だが、その時のぼくの心は、オリンポス山と地獄タルタロスの淵(13)との間のようになり、伯父が繰り返す異教徒の腹立たしい話から遠く離れていたのだ、話の相手をしなければならぬことに激しいいらだちを覚えてしまった。伯父は何度もぼくのことを無知な奴だと思つたに違いない。そのたびに驚いて目を吊り上げ、イライラした様子でテーブル越しにぼくを見ていた。ぼくは食事中まったく情けない気持ちだったが、伯父が好きな話題を情け容赦なく定期的に投げかけてきたため、こちらの好きな方に話題を向ける機会が全然なかつた。だが、ちようど朝食が終わつたとき、召使いが部屋に来て次のように言つた。

「すみませんが、旦那さんにお話があるつてことで、フィートクロフトのお嬢さんがいらつ

しゃっとりますよ」

「ほう、そうか！」と、伯父は席を半分ほど立ちながら叫んだ。「お入りになるよう、お嬢様に伝えてくれ。そうだ、そうだった、リチャード、私が話してたのはな、ポーション⁽¹⁴⁾の翻訳には欠点がいくつも・・・」

伯父がここまで言ったとき、部屋の扉がまた開いた。入ってきたのは——ぼくが先ほど全身全霊を傾けていた女神——花園の女神その人であった。

ぼくはよろめきながら立ち上がった。紹介された時にはかすかな意識しかなかったが、彼女の声を聞いてやっと意識がはつきりした。

「ドクター・マートン、お客様がいらつしやると分かっておりますら、お邪魔するようなことは絶対なかつたのですが・・・今日の午後は授業を失礼させていただこうと思ひ、お邪魔しただけですよ。母がトフター夫人からお手紙をちょうだいし、今日はお屋敷で過ごしませんかと誘われましてね。ホントに素晴らしい天気なものですから・・・」

「ええ、ええ、結構ですよ」と、伯父は愛想よく彼女の言葉をさえぎって言った。「ラテン語は明日まで延期することにしよう。君に話すのを忘れてたけど、エイミー、甥っ子は一週間かそこら私の家に滞在するんだよ。今日の君は忙しそうだから、明日こちらから甥をつれてお母様の所にうかがいます。お元気ですよね？」

伯父がラテン語の授業のことを言ったとき、ぼくはほんの一瞬だがショックを受けた。と

いうのも、当時は女性の高等教育というものに少なからず偏見を抱いていたからだ。しかしながら、すぐに安心した。エイミー・フィートクロフトが普通の青鞥ブルー・ストッキング⁽¹⁵⁾であるはずはない。彼女の場合、たとえどんな知識を身に着けようと、それは完璧な女性をさらに完璧にするのに役立つ美質にすぎないのだから。エイミーはにこやかな笑みをぼくに向けながら部屋から出て行ったが、彼女はその笑みの効果を自分で分かっていたであろうか？

「ミス・フィートクロフトは隣人なんだよ」と、伯父は彼女がいなくなると言った。「あの子と母親はあちらの小さな家に住んでる。しばらく前から週に三日ほど午後三時にウエルギリウス(16)と一緒に読んでるんだが、今日はその授業の日だったんだ。エイミーの古典の素養はそれほど相応なもんだよ」

「フィートクロフト夫人は未亡人なんですか？」と、ぼくは尋ねた。

「かれこれ四年になるかね。ご主人は穀物商で、裕福だったと思うよ。でも、ここに住みだしたのは、ご主人が亡くなってからなんだ。二人のことはあまり知らんよ。だが・・・そうだし・・・さつきは羊皮紙パリンプセスト⁽¹⁷⁾の話をしてたんだっただね？」

同じ日の夕方、食事の時に伯父の牧師補であるチーズマン氏と同席する榮に浴した。この紳士に会ったのは今回が初めてだったが、彼から受けた印象はまったくもって好ましくないものだった。外見は背が高く、どちらかと言えば優雅であり、容貌も大抵の女性がハンサムだと確信をもって言い切るような整った顔立ちだったが、態度の方は極端な気取りに不愉快な偽善

が混ざった感じであった。ぼくは彼がしゃべるたびに注意深く観察していたが、その発言には冷酷で計算高い性格を隠す場合に必要な偽善のようなものが見出せると思った。善良な教区牧師の伯父がぼくと同じような偏見を抱いていなかったのは明らかなので、この牧師補の本当の性格を知る何かよい機会が伯父にはあったのである。しかし、それによってかえって敵対心が燃え上がり、ぼくはチースマン氏のことが完全に嫌いになった。

* * * * *

そういう事情だったので、翌日の午後、ぼくたちがフィートクロフト夫人の客間を訪れ、最初に目に入った人物が牧師補だと分かった時は、まったく嬉しくなかった。彼は安楽イスに腰かけ、ものうげに片足をもう片足の上にのせ、とびきりの洒落者らしく頭をだらりと後ろに投げかけていた。フィートクロフト夫人とその娘も彼と一緒に座っていたが、母親の方は元氣のよい気取った御婦人で、途方もない早口でしゃべり続け、四十歳の峠を越えていたにもかかわらず、魅力的な若い未亡人の役割を演ずるのに余念がないように見えた。ぼくたちが入室したとき、牧師補は帰り支度をするかのようにふるまっていたが、フィートクロフト夫人が許してくれなかった。五時のティーの道具が今にも運び込まれそうだったので、全員お相伴にあずかる必要があったのである。

ティーの間ずっと、バター付きパンに毒を入れようと画策しているのではないかと疑っているかのよう、ぼくの視線は不倶戴天の敵としてのチーズマン氏に固定されていた。彼はフィートクロフト夫人とエイミーの間に座っていたので、二人に対する彼のたゆまぬ献身的な心遣いが否応なく目についた。エイミーに話しかける時はいつも目が輝き、口もとに魅力的な笑みがこぼれた。ぼくはそれを見るたびに、この男のルックスのよさを認めないわけにはいかず、もだえ苦しんだ。エイミーの顔もまた油断なく注意を払って観察してみた。彼女の嬉しそうな笑みは単に親切で気だてがよいから生じたものなのか、それとも何かもつと深い意味のある気持ち語っているのだろうか？ いずれにせよ、フィートクロフト夫人がチーズマン氏の言葉の一つ一つを異常なほど慇懃に受け止めていることは、間違いない事実であった。彼が不真面目な声で何か下手な冗談を言うと、この母親は必ず楽しそうに笑っていたが、それがまたぼくの神経に痛くさわった。

ぼくたちはティーのあと庭を散歩し、そこからポプラ並木の小道の方に行き、その小道を横切って牧師館前の牧草地に入った。ここでは伯父と牧師補とエイミーが先に行ったので、あとに残されたフィートクロフト夫人とぼくは二人だけで会話を楽しんだ。

「それで、牧師補さんのこと、どうお思ひになつて？」というのが彼女の最初の質問であったが、それは極めて重要な内緒事であるかのように思わせぶりな小声でなされた。「とても魅力的な方ですよね？」

「チーズマン氏はとても感じのよい方みたいです」と、ぼくはできるだけ興奮したふりをしながら答えた。「ですが、十分に親しくなれる機会がありませんでした」

「あら、チーズマン氏はお会いしただけで十分に親しくなれる殿方ですわよ。まったく遠慮のない、とても気さくで率直な方です。おそらく立派な古典学者になられますわ。それから、あの方がなさるお説教ときたら、それはもう！ ああ、私、よく拝聴しながら泣くことがありますのよ。あの方は多分いつか主教（18）になられるでしょうね」

牧師補についての話はもうたくさんだった。エイミー自身が彼のことをべたばめしているかどうかは、まだ今のところ確かめることができていない。だが、フィートクロフト夫人の方は、彼が義理の息子という名称を求める気になりさえすれば、いつでも彼のことをそう呼ぶ準備ができていた。ぼくは再び伯父と二人だけになると、思い切って「フィートクロフト夫人は牧師補さんをととても尊敬されてるようですね」と何気ない口調で言ってみた。

「そうだな」と伯父は笑みを浮かべながら答えた。「チーズマンが近いうちに私の仲立ちを求めてきても不思議はあるまい」

「それじゃ」と、ぼくはできるだけ自分を落ち着かせて尋ねた。「ミス・フィートクロフトは彼とすでに婚約してると思えますか？」

「おそらく正確にはまだしてないだろうな。してたら聞かされてるはずだから。だが、いつでも聞く覚悟はできてるぞ」

心の落ち着きを取り戻すために良識を働かせようとしたにもかかわらず、その日の夜は一睡もできなかった。エイミー・フィートクロフトがチーズマン夫人や誰それ夫人になろうがなるまいが、それが一体全体どうしたというのだ？——そう自問してみたが、やはり無駄だった。あの猫かぶりの極悪人（その時のぼくはひどく無慈悲になっていた）が麗しき女性の手をとって教会の祭壇まで導き、伯父が二人に祝福の言葉を述べる場面を考えると、はらわたが次第に煮えくり返ってきた。とはいえ、ぼくが実際どうしようもなく嫉妬していたこと、そうした激しい感情のちゃんとした土台となる根拠が乏しかったこともまた確かである。

翌朝は、あの麗しき乙女がまた庭にいるといけないので、窓の外を見るという楽しみをきっぱり拒んだ。それぐらいは自己抑制ができるようになっていたから、その日は何時間も伯父の書齋で必死に勉強した。そして午後になると、エイミーが授業のために牧師館に来ることが分かっていたので、ぼくは昼食をすませるとすぐ帽子をかぶって野原の散歩に出かけた。とはいえ、夏の爽快な天気のもとで田舎を散策してみても、それは自分で処方できる失恋の解毒剤としては一番軽率な対策だと分かった。そのように数時間ひとりで瞑想したことによって、せっかくの朝の決意もかえって台なしになったからである。ぼくはなんて馬鹿なんだろうか！ しまいに、エイミーがまだ牧師館にいることを期待し、全速力で散歩から返す始末だった。にもかかわらず、その期待はみごとに裏切られた。帰宅してみると、伯父もまた留守で、机に着いて勉強する気にもならなかったので、ぼくは再び家を出て、ゆっくりと小道を歩きな

がら例の田舎家の前を通りすぎた。チラツと横目で見てフィートクロフト夫人と娘が庭にいるのに気づき、心臓がドキドキした。夫人が手招きしながら素早く門扉もんびの方へ歩いてきたため、心臓の動悸はさらに高まった。誘いに応じて長い時間おしゃべりしていたが、その間に何かの用事でフィートクロフト夫人が立ち去ると、ぼくはエイミーと二人だけになった。ああ、悲しいかな！ ぼくはすでに朝の決意をことごとく忘れ去っており、今の喜ばしい状況に抵抗することなく身を任せてしまった。会話の途中で——エイミーはほとんどどんな話題でも実に魅力的に対応することができた——というわけか、ぼくは出し抜けてチーズマン氏の話を持ち出して、この乙女がどのように反応するか観察してみたい気になった。彼女は顔を紅潮させた——そう、頬の赤らみが増したことは間違いなく見てとれた。ぼくはそれを見て無性に腹が立ち、今にもその場で別れを告げるところだった。だが、ちょうどそのとき、フィートクロフト夫人が再び急ぎ足で芝生を横切ってきた。あとに続いた女中は美味しそうなイチゴの皿が並べられた小さなテーブルを抱えている。ぼくの気持ちがいちごだけで和らぐことはなかっただろうが、エイミーがそれはもう魅力的な笑みを浮かべ、ぼくの顔を見上げてセイレーン(19)のような美しい声でイチゴを勧めてくれたので、愚かなことにまた腹の虫が納まった。結局、彼女が顔をポツと赤くしたというのは、多分、ぼくの想像の産物にすぎなかったのだろう。

* * * * *

日を重ねることで牧師館に来てから一ヶ月が経過した。初対面の時にエイミー・フィートクロフトを一目で好きになったにせよ、まる四週間たえず彼女の姿を目にし、母親からは全幅の信頼らしきものを得て、娘自身からも心のこもった友情のしるしを少なからず受けるようになった今、ぼくの気持ちはどうだったであろうか？　しかしながら、ぼくの気持ちは前よりも不安定になっていた。ぼくは田舎家を頻繁に訪問していたが、どうやら牧師補はさらに一層しつこく訪れているようだった。母と娘の両方に対する彼の心づかいは日ごとに増し、母親の方は彼に対してどんなに親切にしてもしすぎることはないみたいである。それに対し、娘の方は牧師補のいる所でぼくがあまりに鋭い視線で彼女を観察しているのに気づき、ますます不安になつているように見えた。エイミーの不可解な行動の意味を見出そうとするあまり、ぼくは昼も夜も落ち着かなかつた。この点に気づいた伯父からは、寝室での夜更かしがすぎるとは言われる始末だった。伯父は自分との解釈上の言い争いでぼくが寝付けないのだと完全に思ひ込んでいたようである。

こういう感じで六週間ほど経つたとき、ぼくの疑念は突如としてスカッと晴らされた。ある日の夕食後のこと、庭の座席までぶらぶら歩いて行くと、ちょうど牧師館の上の夜空に浮かんでいる美しい満月を見ることができた。その座席は、読者の皆さんは憶えておられるかもしれないが、牧師館の庭と隣の田舎家の庭とを仕切っている背の高いヒイラギが茂った生垣のすぐ下にあった。そこで深い夢想にふけっていると、突然、生垣の反対側を歩く足音がぼくの耳に

聞こえた。エイミーにせよ母親にせよ、庭を散歩するにしては時刻が遅すぎたが、徐々に聞こえるようになった低い声から判断して、最初は彼女たちに違いないと思った。しかしながら、そうではなかった。声がさらに近づくと、少なくとも片方は聞き覚えのある声だったので、間違はなくチーズマン氏のものだと思い、ぼくはすぐに修羅しゅらを燃やしながらも聞き耳を立てた。そうした場合は、こちらの存在を悟られないように身動きせず、音も立てないのが人間の性さがというものだ。

「それはあまりに残酷です」と牧師補が小声で言った。「三週間で——それ以上は無理です」それに対する返事の方はささやき声で聞き取れなかった。

「じゃあ、同意してくれたんですね」と、彼は歓喜の感情を押し殺して言った。「三週間したら、私のもの、ものになつてくれるんですね?——私は最高に幸せな男だ!」

そのあと沈黙が続いたが、その沈黙を破る小さな声の短い言葉を聞いて、ぼくの血は怒りでも煮えたぎった。向こう側の注意を引くことになろうがなるまいが、そんなことはもうどうでもよい。ぼくはすぐに座席を蹴つて急いで立ち去った。

その日の夜は絶望のあまりま**んじり**、**ともし**なかつたが、そのことについて話すつもりはない。翌日は、すぐ牧師館を離れようと決心して、二階から朝食に降りてきたと言うだけで十分だ。運よく実家から手紙が届いていたので、それを理由に間髪いれず出立することにした。伯父が驚いたことは言うまでもない。激怒していたと言つてもよい。さらに悪いことに、ぼくは

他人の気持ちに繊細な配慮を払うような気分ではなかった。隣の人たちへの別れの挨拶をきっぱりと断つてもよいだろうか？ それはちよつとできなかつたので、皮肉の一つも言いたくないような苦々しい気分で、この儀式に立ち向かつた。そうした雰囲気は全員にはつきりと分かつたはずである。ぼくがさようならと言つと、エイミーはひどく顔を赤らめた——それも当然だろう。一方、母親はどうかと言えば、これほど上機嫌な姿は見たこともない。若返つたように見える彼女の満面に浮かぶ笑みに、ぼくは言ひようもない責め苦を味わつた。急いで立ち去る際に、これはまたひどい目に遭わされたものだと思つた——でも、誰によつて？——それが誰であるのか、はつきりさせるのは相当むずかしかつたような気がする。

* * * * *

それから半年以上が経つてから、ぼくはセント・レナーズ⁽²⁰⁾で復活祭の休暇を過ごしてゐた。ひとりぼっちだつたのは、そそくさとハンプシャー州を立ち去つて以来ずっと、憂鬱の虫がぼくの心にたえず棲みつき、人付き合ひにうんざりしてゐたからだ。精神的安定を得たいと思つて必死に勉強してゐたのだが、度が過ぎて病氣になつてしまい、医者から休息と転地を命じられていたのである。

その後も伯父とは手紙のやり取りをしてゐたが、彼は自分自身の勉学と長期間たずさわつて

いる学術論文の進捗状況を除いては——彼がニュースのようなものを書いてきたことは一度もない——彼自身の流儀モレイス・ス・オウだが、ほとんど何も書いていなかった。ぼくはぼくで、エイミーが本当に結婚したかどうか、あえて尋ねることもしなかった。とはいえ、あのいまましい縁組がひよつとしたら頓挫したかもしれないという、突拍子もない期待にぼくはとらわれていた。エイミー・フィートクロフトがチーズマン夫人に変わるなんて想像もできなかったからだ。ぼくは海辺の遊歩道にあった腰かけに座り、ひざの上には読みもしない新聞をのせ、そんなことを百万回も考えていた。その時たまたま視線を上に向け——前を見続けていると、すぐ目の前を三人のグループが歩いているのに気がついた——一番向こうは間違いなく牧師の、チーズマン氏、その次がフィートクロフト夫人、そしてその横がエイミーだ。ああ、優雅な海辺の衣装をまとって、この上なく美しいパラソルできれいな顔を太陽光線から守っている彼女が、なんて美しく見えたことか！ 彼女たちはぼくに気づきもせず、楽しそうに話しながら通りすぎて行った。

こちらの姿が気づかれなかったのは喜んでよいのか、はたまた悲しむべきことなのか？ おそらく全体としては嬉しいことだ。なぜなら、ぼくの自己欺瞞いぢごん的な一縷の望みが情け容赦なく断ち切られていたら、その場で冷静に行儀よくふるまうことなど、とてもできなかったからだ。そうなっていたら、多分、いけ好かない牧師補の目から勝ち誇ったように放たれる視線を耐え忍ばねばならなかっただろう。前にもよく思っていたことだが、彼はぼくのことをこそ

こ、そ、した恋敵だと考えていたに違いない。そうだ、彼女たちが気づかなくて本当によかった。ぼくに残された道は即刻セント・レナーズを離れること以外にない。こんなことがまた起こったら、それこそ完全に発狂してしまうだろう。

ぼくはすぐさま下宿に戻って大家さんに退去前の予告をし、食事をするように見せかけてから、荷造りをする前に、実家用にちよつとした土産みやげを一つか二つ買いに出かけた。お土産屋に到着し、窓に展示された品物をしばらく吟味したあと店内に入ろうとしたが、ちょうどその時そこから誰が出てきたかと言え——なんとエイミーだった！ 彼女はひとりだった。小さな包みを手に持っており、ぼくと鉢合わせしたことに気づくと、とても驚いた顔をし、そのまま氣を失うのではないかと思つたほどである。しかし、彼女は落ち着きを取り戻すと、真っ赤な顔になつて手を差し出し、口ごもりながら「マートンさん！ あなたでしたの？」と言つた。「お元氣ですか、チーズマン夫人？」と、ぼくはできるだけ威厳のある礼儀正しい態度を装いながら返答した。

彼女は驚きが他のすべての感情を圧倒してしまつたような顔でぼくをじつと見つめてから、なんとか口ごもりながら「あなたは——あなたは何か変な勘違いをなさつてますね。どうして私のことをチーズマン夫人とおっしゃるんですの？」と尋ねた。

ある推測が最初にパツと頭をよぎつて、ぼくは飛び上がるほど驚いた。今度はぼくがひどく狼狽した顔になり、口ごもり、顔を赤らめ、氣を失いそうになる番であつた。

「ひらにひらに御容赦ください！」と、ぼくは大きな声で言った。「ぼくは——ぼくは聞かされたんです——最後にお別れしてから、あなたがチーズマン夫人になられたってことを！」

「変てこりんな間違った情報ですこと！」とエイミーは答えたが、そのすてきな目には声に出さない笑いがあふれていた。「去年の秋にチーズマン氏と結婚したのは私の母ですよ。私は——私はあなたが御存知の時のままですわ」

かつて心の中で声に出さない感謝の讚美歌を歌った男がいるとすれば、それは彼女の説明を聞いた時のぼく自身であった。ぼくも伯父も牧師補の求愛について完全に誤解していたのだ。これまで時々ぼくの心を悩ましてきた多くのこと、とりわけエイミーの母親とチーズマン氏の二人がいる時の彼女の不可解な態度は、とても簡単に説明することができた。というのも、親愛なるエイミーがこの縁組を受け容れるのに少なからず苦労し、この問題を他人がどう思うだろうかと考え続けていたことは間違いないのだから。ヒイラギの生垣の背後から聞こえた第二の声に、ぼくがもっと近づいて耳を傾けてさえいたならば！

「それじゃ、まったく結婚はしてないんですね！」と、ぼくは思わず叫んでしまい、とんだ自分の愚かさにプツと吹き出した。エイミーも一緒に歩きながら笑っていた。彼女はとても気が楽になったみたいで、ぼくがすぐさま彼女の母を訪問したいと言うと、二つ返事で許可を与えてくれた。チーズマン氏と彼の澁刺とした花嫁さんは優雅な部屋に住んでいたが、ぼくの顔を見ると本当に嬉しそうだった。これはもう是非ともセント・レナーズでの滞在を延ばさなけ

ればならない。

滞在は二週間の延期となったが、その間にちよつとした事件が起こった。ぼくにとつてはかなり興味深い事件だった。ある日のこと、例の勘違いの話をすべてエイミーに語る機会があったので、そのついでに別の、非常に古くからある、あまり珍しくない話も加えて語つてあげた。それはぼくたちがみんな、いつの日か、自分にとつては全世界の中心であるように見える相手に語ることになる話である。その話は語つてみても徒勞に終わることが多いが、ぼくの場合——読者のみなさん、一緒に喜んでください——ハッピー・エンディングでした。

結局のところ、ぼくのチーズマン氏の性格に関する評価はさほど間違つてはいなかつたよ。うだ。そのあとほどなく、彼が自分よりずっと年上の——どう見ても彼の方が相手を恋の虜にしたとしか考えられない——結構お馬鹿な女性と夫婦の契りを交わすことになった経緯を聞かされ、「なるほどそうか!」と納得する機会が訪れた。事實はこうだった。ちよつどその頃、とても素晴らしい聖職^{リッディング}禄⁽²¹⁾を購入できるチャンスが彼に訪れたので、フィートクロフト夫人が喜んで彼に必要なお金を用立ててやったのである——ぼくたちが知っているささいな条件を付けて。

【訳注】

- (1) フランス北西部、イギリス海峡に面する旧州。中心都市はルーアンで、一般に湿潤な気候のもとで酪農が極めて盛んな地方。
- (2) イングランド南部のイギリス海峡に面した州。州都はウィンチェスターで、丘陵地帯では羊や豚が飼育され、沿岸には港や保養地が多い。
- (3) 優等賞 (honours) は英国の大学で学部課程を卒業する時に成績優秀な学生に授与される。
- (4) ギリシャ神話のキルケー (Circe) はホメロスの『オデッセイ』では魔女として登場し、トロイ戦争のギリシャ側の大将オデッセウスに魔術をかけるための霊薬が入った杯を与えた。
- (5) 出典はケンブリッジ時代の同窓生が航海中に溺死したのを悼んだミルトンの牧歌的な哀歌『リシダス』(Uxidas, 1637)。
- (6) アイスキュロスの『アガ멤ノーン』では、ギリシャ軍の総大将アガ멤ノーンのトロイ戦争からの凱旋に合わせて、コーラス隊がギリシャの勝利を称えて歌う。
- (7) イギリスの古い教会の墓地で鬱蒼と茂っているのはイチイの木 (Yew) が多い。イチイは常緑樹で寿命が長くて長持ちすることから節操と信仰を表すが、死の象徴でもあることから、これを家に持ち込むのは縁起が悪いとされる。
- (8) ギリシャ神話によると、曙の女神オーロラ (ローマ神話のエロス) は太陽が昇る前に一日の到来を

告げるために姿を現したという。

(9) チョーサーの『カンタベリー物語』中の「騎士の話 (The Knight's Tale)」では、テーベの若者バラモンは友人アルシータとともに捕虜としてアテネに連れて来られたが、二人とも牢獄の窓からたまたま見かけた美女エメリーに恋をし、互いに不仲となる。

(10) スコットランド王ジェイムズ二世 (在位一四〇六〜三七年) は十一歳の時に敵対するイングランドの人質としてウィンザー城に軟禁されたが、そこでヘンリー五世の従妹ジョウン・ボフオート (別称レディー・ジェイン: Joan Beaufort, c.1379-1440) と恋に落ち、恋文の代わりに「王の献辞 (The King's Quair)」を贈った。

(11) 「オジギソウ (*Mimosa pudica*)」は「感覚植物 (sensitive plant)」の代表格で、振動や軽い接触、温度の急変などで体の一部が運動する。学名のラテン語 (*pudica*: “shy, bashful or shrinking”) が意味するように、花言葉は「繊細な感情、感受性、敏感」。シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) の詩「オジギソウ」 (“The Sensitive-Plant,” 1820) では、庭園の世話をする淑女^{レディー}の命が尽きるとともに、「貞淑な女性」という伝統的な表象としてのオジギソウも枯れ果てる。

(12) テニソンの「庭師の娘」 (“The Gardener's Daughter,” 1842) は夜の嵐で散歩道に倒れたバラの茂みをもと通りにするローズという名の褐色の髪と青紫色の目をした少女を描いた愛の詩。

(13) オリュンポス山 (Olympus) はギリシャの最高峰で、ゼウスをはじめギリシャ神話の神々の住んだ地。タルタロス (Tartarus) は死者の霊がいる冥府の下にあるという日の差さない底なしの淵。

- (14) 英国の古典学者 (Richard Porson, 1759-1808) で、ギリシャの悲劇詩人アイスキュロスとエウリピデスの校訂者として有名。
- (15) 文芸趣味のある女性、才学をちらつかせる女。言葉の起源は、十八世紀ロンドンの文芸サロンの指導的人物の中に、伝統的な絹の黒ではなく、紺色の毛糸の長靴下をはいていたことから。
- (16) 古代ローマの詩人 (Publius Vergilius Maro, 70-19 B.C.)。民族的叙事詩『アエネイス』がもともと有名で、のちにローマ帝国初代皇帝アウグストゥスの宮廷詩人となった。
- (17) もともと古文書についての用語で、羊皮紙が高価だったので、もとの字の一部または全部を消した上に新たに字を書く習慣があった。
- (18) 一定地域にある複数の教会によって構成される教区 (diocese) を管轄する。
- (19) ギリシャの伝説的な三人の海の精で、美しい歌声によって水夫たちを誘って溺れさせた。
- (20) イースト・サセックス州南東岸の都市ヘースティングズの西隣の町 (St. Leonard-on-Sea)。十九世紀前半に富裕層のために開発された海辺のリゾート地で、ヘースティングズ海岸に沿って東西に遊歩道 (Grand Parade) が走っている。
- (21) 牧師補 (curate) は教会を持つ牧師 (rector) の助手または代理を任務とする。実際には牧師として聖職禄を手に来たのは少なく、特に大学教育を受けていない下層階級出身の聖職者は牧師補として生涯ずっと薄給に甘んじていた。

